光抱く友よ

高樹　のぶ子　著
新潮社（新潮文庫）　1987 年

この本に出会ったのは 30 年ほど前である。当時の私は、小郡市立図書館で読書会の担当をしていた。ほぼ 1 ヶ月に 1 回開催される会には、その月の課題図書を事前に読んでから望むのが条件であった。毎回最初に、講師の先生が作者の紹介や作品の背景などを解説し、その後で出席者全員が感想や意見を述べて、ディスカッションを行う。約 2 時間の会は、20 人ばかりの女性たちの熱いトークであっという間に終わっていた。

読書会の課題図書だったこの本を改めて読んでみたが、主人公の高校 2 年生の相馬涼子と 1 つ年上の同級生松尾勝美との友情を描いた小説だった。切れそうで繋がっている二人の若者の友情に、忘れかけていた青春時代の新鮮な感動が蘇ってきた。

勝美はアル中でよく暴れる母と取っ組み合いのけんかになりながらも「母はいい女ですよ。」と断言する。そして、勝美が「微光を放つ大きな玉のようなものを抱え」て涼子の前から去っていく最後のシーンは学生の皆さんにもぜひ味わっていただきたい。

なお、高樹のぶ子氏は、この本で芥川賞を受賞したが、その後も福岡で数多くの恋愛作品を書いている。また、長く芥川賞の審査員を務めていることで、平成最後の年の文化功労者へとなったことを追記しておく。

永利　和則（福岡女子短期大学教員）